山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第9号（1998.3）

現代版・桃太郎ばなしと歴史教育の基礎

岩　崎　好　成

Japanese Folktale "MOMOTAROU" and the Elements of History Teaching

IWASAKI Takashige

(Received December 1, 1997)

はじめに

桃太郎は、戦後、「民衆の子」として本来の姿に戻った。が、ここで、あえて日本の現状（現代）を反映させて新たな桃太郎像をつくるとしたら、どうなるか。〇〇の子、として描け。

筆者が担当するある講義においては、その初回終了15分前に、上のようなアンケートを提示し、受講生に答えてもらうようにしている。「桃太郎」とは、あの民話の桃太郎のことである。

「『民衆の子』として本来の姿に戻った」とあるのは、実は、桃太郎ばなしの内容が、明治から戦前・戦中にかけて変容を被ったことを意味している。つまり、後述するように、たとえば、明治の頃の桃太郎ばなしと通常我々が理解しているそれとは少々内容を異にする、ということである。

講義では、この桃太郎ばなしの変容を紹介した後、先のアンケートを行う。この際もう一度受講生の手で変容させてしまえ、というわけである。そこで、「日本の現状（現代）を反映させて新たな桃太郎像をつくるとしたら」というアンケートの文言になったのである。

さて、前掲「筆者が担当するある講義」とは、一年次後期に開講している初等教育教員養成課程の教科に関する科目「初等科社会（歴史学）」を指す。その前半7回分が筆者の担当である。

受講生には中学校社会科の教員免許取得を目指さない者も含まれており、彼らにとってはこの時間は、歴史学系講義と出会う稀な機会の一つということになる。そして彼らは、必ずしも歴史というものに親近感を抱いてはおらず、苦手意識をもっている者も多い。したがって、この短期間の講義を行う上で筆者に要請されるのは、内容的には、小学校で歴史教育を担当する可能性をもつ者にとって不可欠となる最も基礎的かつ本質的な事柄とは何か、を伝え考えさせることであり、と同時に、方法的には、極力詰め込みを避け削りに

削った内容を、できるだけ魅力的な形で受講生に提示することであろう。

私見では、小学校での歴史教育上の最高目標とは歴史を好きな子どもに育てることであり、当然これを本講義で伝える内容の主要な一つとするのであるが、しかし、それを歴史嫌いを含む受講生に伝えるには、方法的に一定の工夫が求められるであろう。単なる一方通行的講義形式では、いかな重要論点も、彼らの頭の上を通り過ぎるに違いない。

他方、受講生には歴史を得意科目と唱える者もいるが、それは単に暗記が得意というだけに過ぎないことも多く、そこでは、自らがもつしばしば浅薄な歴史学像、歴史教育像が疑われることは少ない。したがって、歴史好きの彼らに教えられれば子どもも歴史が好きになる、と考えるのはあまりに楽観的ということになろう。(そこで、この講義は、数年前から、中学校教員養成課程社会科の入門講義「歴史学概論」としても開講されている。同課程に所属する学生もまた歴史学（習）への固定観念が強く、それを揺さぶる必要性は大、と考えるからである。)

以上要するに、この講義は筆者に、

①小（中）学校歴史教育を行う上で身に付けておくべき最低限の事柄を吟味精選すること

②それを確実に受講生に伝え、彼ら自身の問題として考えてもらうための手立てを工夫すること、

を要請する。もとより筆者は、この難解な課題に応えるだけの力量を持ちあわせてはいないが、ともあれ以下では、97年度の模索について報告してみたい。

但し、紙幅の関係上、報告は、初回および第二回の講義内容紹介が中心となる。この導入部の講義に特に求められているのは、受講生をいかに魅きつけるか、ということであろう。そのために選択した素材が桃太郎ばなしの変容というわけである。初回講義では、桃太郎ばなしを、落語のそれに触れたり話のルーツに関する二、三の解釈に触れたりして思い出してもらった後、概略次のようにその変容ぶりを紹介した。

1．初回講義――桃太郎ばなしの変容

鳥越信『桃太郎の運命』は、「その時々の政治的・社会的・文化的な変化と共に、桃太郎の姿もまた振子のようにゆれつづけてきた」と言う[(1)]。

まず同書は、明治期の桃太郎を「皇国の子」として位置づける。つまり、たとえば、巖谷小波の作品『桃太郎』にあっては、鬼は天皇の教えに背く者とされ、その退治は「皇国の安寧を計る」ものであった。鬼ケ島遠征の動機も、本来物語の必然的な宿命として定められていたのに対し、ここでは、「皇国の為めに」ということが強調される。同様に、森桂園『鬼が島』においても、桃太郎は「大日本帝国の豪傑」と形容され、「鬼征伐をしてお国のために忠義をいたしたい」とのセリフが見られる。いわば、新しいナショナリズムの旗手、としての桃太郎が、この時期登場したのであった。

大正期の桃太郎は「童心の子」である。楠山正雄の作品においては、桃太郎は、「どこかひろい外国へ出かけて、腕いっぱい力だめしをしてみたくて」鬼ケ島へ行く。「皇国の子」としての面影は全くない。物語の結末部分も、遠足にでも行ってきたかのように「鬼せいばつはおもしろかったなあ」と犬たちに語り、「空は青々と晴れ上がって、お庭には桜の花が咲き乱れていました」との牧歌的一文で締めくくられている。同時期の他の作品には、遠征に出た桃太郎をホームシックにかからせて英雄の座から引き下ろし、無邪気な子どもというにとどまらず、むしろ弱点をもった人間としてイメージしているものもあっ

た。

昭和の初期には、プロレタリア児童文学の影響を受けた桃太郎ばなしが現れてくる。「階級の子」としての桃太郎である。ある作品においては、鬼とは小作米を取りに来る地主のことであり、桃太郎は地主の横暴に反発する農民の代表である。おばあさんはキビ団子を作りながら言う。「のう桃太郎や、米を作りながらキビばかり食わなならんようなこんな世の中が又とあろうかいな」。別の作品では、ついには桃太郎自身が搾取者となる。ここでの桃太郎は犬たちをキビ団子半分で雇い、遠征終了後はお払い箱にして、奪った宝を独り占めする。怒った犬たちは、桃太郎の、龍宮城へ乙姫を奪いに行こう、との新たな誘いにはもはや乗ることはなく、その搾取・侵略性を非難するのである。

その後の軍国主義下の桃太郎は「侵略の子」である。たとえば佐藤紅緑の『桃太郎遠征記』においては、遠征とは、悪魔の支配する西洋諸国を征服し日本の威光を全世界に示す旅、となる。桃太郎は言う。「勤勉国の精神を以て西洋から来た怠惰の鬼を打ち殺してやる」。「侵略の子」はまた「皇国の子」でもある。「鬼の国を征伐して、みんな日本風にしてしまわねばなりません。僕はもう十五歳です。男は十五歳になれば、国のためを考えなきゃなりません」。おじいさんも次のように言う。「お前に別れるのは辛いが・・・お国のためだ、そうだ、お国のためならどんなことでも忍ばなきゃならん。・・・世界中に日本の国のありがたさを知らしてやってくれ」。

そして敗戦。ここにこれまでの恣意的変容への反省が生ずることになる。当初は「戦犯・桃太郎」への禊ぎが必要として、桃太郎から軍国主義を象徴する刀や扇子、「日本一」の旗印を取りあげたり、あるいは侵略イメージ払拭の念から、桃太郎に「たからものはいらん」と言わせたり、やや行き過ぎも見られる。が、次第に、伝承本来の「民衆」の中から生まれた桃太郎への復帰がなされ、今日我々が理解する桃太郎ばなしとなるのである。鳥越氏によれば、鬼とは、桃太郎ばなしが創り出された当時の民衆（農民たち）を苦しめる社会的仕組みや自然の脅威など一切を象徴するものであり、桃太郎は、その苦しみから農民を救う希望の星であった。ちなみに、民話の主人公が最後に手にする幸せすなわち物質的富や働き者で美人の妻、権力といったものは、当時の民衆の願い・夢に他ならず、したがって、桃太郎が「たからもの」を持ち帰るのは至極当然のことだったのである[(2)]。

2．97年度版桃太郎ばなし——第二回講義①

この後、冒頭で示した現代版ミニ桃太郎ばなしの作成ということになる。第二回講義はそのアンケート結果の“ベストテン”風の紹介で始まる。さて、1997年の桃太郎はどのような姿を呈したのであろうか。

回答数64のうち最高の８点を数えたのは、「主体性のない子・マニュアルの子・言いなりの子」である。そのうち二点を示してみる。

「人任せの子。桃太郎はいつも無気力で身体を鍛えようともしない。大きくなり追い出されるようにして鬼ケ島へ向かう。いざ島に着くと自分は隠れ、猿たちに鬼を退治させ、宝をせしめて帰ってくる。が、怠け者の性格は変わらず、おじいさんとおばあさんが死ぬまでは二人の言うままに生き、その後は適当に見つけた嫁のかかあ天下で終わる。」

「流行の子。自分がやりたいからではなく、他の人がやっているから自分もやる、という性格。最近鬼ケ島へ行ってちょっとした鬼退治をするのが流行っているから自分も行き、みんな動物を連れて行っているから、とりあえず自分も猿や犬を連れて行く、といった風

に物事を進める。」

7点を数えて二位に入ったのは「いじめの子」としての桃太郎である。

「桃太郎は実はいじめっ子である。両親の不仲による家庭不和から情緒不安定となり、そのやり場のない感情を学校での弱い者いじめで発散する桃太郎。宝物は奪った金品であるが、その金で更なる犯罪に手を染め、次第に学校からも足が遠のいてしまう。本物の幸せはどこにあるのか。」

「桃太郎は、初めはいじめられてばかりで登校拒否をする子であったが、最後にはいじめを自ら克服してしまう。サルやキジなどは桃太郎の親友であったり、学校の先生であったり、心理カウンセラーであったりする。そして桃太郎は鬼であるいじめグループに、力ではなく平和的なやり方で立ち向かう、という話。」

三位には「賄賂・不祥事の子」と「(反) マスコミ・情報社会の子」がはいった（各5点)。

「汚職の子。桃太郎＝高級官僚もしくは政治家。鬼＝汚い手口で発展した会社の重役。桃太郎は鬼が不正をしていることに気づき征伐に行くが、捕まりたくない鬼は賄賂として宝物を差し出す。宝物に目がくらんだ桃太郎は鬼の不正を見逃すが、それを見とがめた部下の犬・猿・雉の内部告発により逮捕される。」

「情報社会の子。鬼退治に見事に成功した桃太郎は一躍日本のビッグスターになり、マスコミの取材攻勢を受ける。日夜パパラッチに監視され気の安まる時がなく、ノイローゼ気味になる。芸能界に友達も増えた桃太郎は彼らの苦悩を知り、お互いのプライバシーを守るため、マスコミ（ワイドショー）に襲撃をかける。」

五位には三種類の桃太郎像が入った（各4点）が、うち二つを先ず紹介してみる。

「無関心の子。権力を振りかざされたりして困っている人はたくさんいて、その人々から助けてほしいと頼まれても、自分には関係ないと突っぱねる桃太郎。が、自分の家族に大変なことが起こって初めて青くなり、鬼を退治しようとする。だが、自分がまわりに助けを求めても誰も助けてくれなかった。自分も昔おなじことをしたのだった、と後悔するという話。」

「独りぼっちの子。鬼は両親や先生等の身近な大人。現代の大人は子どもが何をしようが無関心なところがある。たとえば、万引きをする理由の多くが『自分を見て欲しい』というものである。そこで、大人の目を何とかしてもっと自分たちに向けさせたい、という子ども（＝桃太郎）の話になると思う。」

五位にはもうひとつ、上述のものとは若干様相を異にする、とりあえず「多様化の子」と名付けたものが入っている。これは、「現在の桃太郎にとって、不利益な圧力をかける鬼の存在は多種多様である。一人の桃太郎に対して鬼は複数だ。」とか、いくつかのミニストーリーを述べた上で、「現代は多様化の時代でやろうと思えば色々できるが、ボーッとしていて何もできない」としたり、あるいは、「現在はこれまでのような明確な考え方がうすれてしまった時代なので、答えるのがとても難しい。」と記されたものである。後述するように、講義ではこの後、過年度のアンケート結果を紹介するのだが、従来このような、○○の子を特定しえない、との回答は存在しなかった。ちなみに、「ストレスの子。鬼とは現代の社会全体である。その下で、子どもはストレスをためこみ苦しんでいる。」と答えた受講生は、楽観的に、「桃太郎（＝苦しんでいる子ども）が鬼退治をする。その手助けとなる教育をしたいものだ。」としていたが、「多様化の子」と答えた者にすれば、

苦しんでいる子ども自身が退治できるような甘く単純な社会では今はない、ということになろうか。

他にユニークなものとして、「強くなったコギャルが鬼。弱々しくなった男の子たちが桃太郎。鬼を退治して得た宝は、結局かつて自分たちがあげたものばかりだった。」とする「女の子の尻に敷かれっぱなしの子」や、「様々な身体・髪の色をして自由にふるまう個性的な鬼たち（＝子ども）の存在を許さず、制服・規則を作って統制しようとする、文部省で活躍する桃太郎」というもの等があった。

3．過年度の桃太郎ばなし——第二回講義②

続けて第二回講義では、同じ桃太郎ばなしアンケートの過年度の集計結果およびその内容の幾つかを紹介した。〔表1〕は、過年度のベストセブンをまとめたものだが、講義で配付したプリントでは、時間の制約上ベストスリー程度にとどめ、また84年度のものは割愛してある。以下、実際の講義よりも若干詳しい部分もあるが、過年度特に80年代の桃太郎像について解説しておきたい。

まずは84年度受講生のアンケート結果から見ていこう。（回答数は130前後[3]。）

第一位は20人が挙げた平和・核問題を反映させた「平和・友好の子」。一例を示せば、次のような内容である。

「桃太郎は世界平和を願う人々の象徴であり、イヌ・サル・キジは種族を越えて協力し合う世界中の人々である。鬼ケ島は一か所とは限らず世界中の武器格納庫で、鬼は核兵器など。鬼の大将は、そうした武装を推す人々の象徴である。桃太郎軍は攻撃を繰り返し比較的優勢であるものの、鬼はかなり多数で大将候補も多いため、戦いは長びいている。もし倒したとしても、どこかに別の鬼ケ島が隠されているので、現代の桃太郎に安息の時は当分来ないだろう。」

第二位（11人）は、教育問題に絡めた「学歴社会の子・いじめの子」。（後のアンケートでは、「学歴社会の子」と「いじめの子」は分化し、独立項目となる。）同じく一例を示すと、

「落ちこぼれの子。鬼ケ島へ行く理由——色々な入試制度を考えだした頭の固い大人（＝鬼）を退治するため。雉・猿・犬＝落ちこぼれの仲間。ストーリー——鬼を退治して宝物を持って帰った桃太郎は、それを独り占めしサラ金業者になろうとしたけれど、自分の能力の無さに気づき、宝物をお金に換えて、某有名私立大学に裏口入学したのでした。」

第三位は二つあり（各10人）、「利己主義の子」および「無気力・無関心の子」である。前者は、「俺は自分の名声を高めるために鬼退治に行く」と宣言し、後者は、「お祖父さんお婆さんに干渉されすぎて・・・大人になってもちゃんとした仕事に就く気もない」桃太郎として描かれている。

五位には、アメリカ依存の日本を象徴するものとしての「アメリカの子」が入っている（９人）。桃太郎は言う、「だってレーガンさんが鬼ケ島へ行けって言うんだもん、仕方ないじゃない」。ちなみに、「軽薄短小」や「いいとも」と共に「ロン・ヤス」「不沈空母」が流行語となったのは、前年83年のことである。

以下、「科学の子・コンピューターの子」そして「正義の子・秩序の子」が各８人と続く。その他、鬼を田中角栄とみなし、桃太郎が新潟へ行って国会議員を辞めるように説得

するというのもあった。桃太郎の説得もむなしく、現実の角栄氏が90年の解散まで議員辞職をしなかったのは周知のところである。

次に86年度アンケートのベストセブンを挙げれば、以下のようになる（回答数115）。
①いじめの子(26)　②ファミコン・TVゲームの子(11)　③新人類の子(10)　④平和・軍縮の子(7)　⑤無気力・無関心の子(6)　⑥（反）マスコミの子(6)　⑦学歴社会の子(5)

ここでは「いじめの子」というのが圧倒的に多い。

「真面目で優等生の桃太郎は使命感に燃え、鬼ケ島へいじめっ子を退治しに行こうとしたが、猿も雉も犬もそんな桃太郎と関わり合うのがいや（傍観者）で賛同しなかった。それ以来、桃太郎はみんなから煙たがられる存在となり、独りぼっちになっていった。」

「いつもいつもいじめられている桃太郎は、ある日友だちに『弱虫』といじめられ、『僕は弱虫じゃないもん。』『だったら鬼ケ島へ鬼退治に行け』と言われ、鬼退治に行く羽目になってしまった。島に着いた桃太郎は鬼のすみかにもぐりこんだが、鬼にどなられ、あっさり捕まってしまった。桃太郎が鬼退治に来たわけを話すと、鬼は『いじめっ子のほうが鬼だ！』と言って、桃太郎に策略をさずけて帰らせた。桃太郎は鬼に言われたとおりいじめっ子に仕返しをした。」

ちなみに、いわゆる臨教審がいじめ対策を集中審議し、教員にいじめに対する真剣な対応を呼びかけたのは、85年10月のことである。

「ファミコンの子」の場合は、ほぼ桃太郎＝ファミコン好きの子ども、鬼＝勉強を強制する母親、という設定であるが、中には任天堂＝鬼ケ島とするものもあった。なお、85年一年間で650万台以上のファミコンが売れたそうである。

「新人類の子」には10点が集まったが、新人類の定義が文字通り十人十色であった。ここでは二例示そう。

「新人類の子桃太郎は大きくなったが、鬼を退治しに行くのを面倒だと思っていた。しかし、おばあさんが『退治したらパソコンを買ってあげよう』と言うので行くことにした。途中キジや犬に出会った時、お互いのプライバシーには触れないという約束で仲間になった。鬼ケ島では鬼がファミコンに熱中しており、桃太郎もやりたかったが宝物も欲しいので、宝物を奪いにかかるが、あまりにたくさんあるので持ち帰るのが面倒臭くなり、重荷にならない程度しか持って帰らなかった。それを知ったおじいさんとおばあさんは腹を立てたが、桃太郎は無関心で、おじいさん等に見切りをつけ一人暮らしを始めた。」

「桃太郎はスマートな体つきで髪の手入れに気を配り、ファッション感覚もナウいシティーボーイ。鬼ケ島へ行くのも気乗りはしなかったが、暇だったのと鬼退治をすれば目立てるのとで、ちょっと見栄を張って行くことにした。島に行ってもきゃしゃな体つきの桃太郎はもちろん鬼と戦う体力はないし、最初から自分の体力を使うつもりもない。そこで一言。『オレをスターにしてくんない？』。鬼たちは桃太郎の今後の稼ぎの10％をもらうことで納得する。」

五番目に「(反) マスコミの子」が挙がっているが、ビートたけし等が「フライデー」編集部に押しかけたのは、アンケート実施直前のできごとである。その他、「中流階級の子」として現状に満足し、「生活に困っているわけじゃなし、危険を冒すこともなかろう」と鬼退治が成立しないという話、更には、桃太郎自体が生まれないという話もあった。

「桃が流れてきておばあさんは考えた。『あー大きな桃だ。欲しいけど後で面倒なことになっ

〔表１〕現代版桃太郎ばなしアンケート結果

＜84年度（回答者130?人）＞ 1.平和・友好・国際協調の子(20人) 2.学歴社会・受験戦争・いじめの子(11) 3.利己主義の子(10) 3.無気力・無関心・目的のない子(10) 5.アメリカの子(9) 6.科学・コンピューターの子(8) 6.正義・秩序の子(8)	＜93年度（89人）＞ 1.学歴社会・受験戦争・塾通いの子(24) 2.主体性のない・マニュアルの子(12) 3.賄賂の子(7) 4.宗教・世紀末の子(6) 5.Ｊリーグの子(5) 6.無気力・無関心の子(4) 6.環境保護の子(4)
＜86年度(115人)＞ 1.いじめの子・いじめられっ子(26) 2.ファミコン・TVゲームの子(11) 3.新人類の子(10) 4.平和・友好・軍縮の子(7) 5.無気力・無関心の子(6) 5.（反）マスコミの子(6) 7.学歴社会・受験戦争の子(5)	＜95年度（83人）＞ 1.無気力・無関心・目的のない子(15) 2.いじめの子(11) 3.主体性のない・マニュアルの子(9) 4.学歴社会・受験戦争の子(6) 4.ファミコン・TVゲームの子(6) 6.孤独・孤立の子(5) 6.宗教の子(5)
＜88年度(190人)＞ 1.学歴社会・受験戦争の子(25) 1.甘え・マザコン・優柔不断の子(25) 3.平和・友好・国際協調の子(17) 4.金銭欲・金持ちの子(16) 4.無気力・無関心の子(16) 6.ファミコン・TVゲームの子(13) 7.科学・ハイテクの子(10)	＜97年度（64人）＞ 1.主体性のない・マニュアルの子(8) 2.いじめの子(7) 3.賄賂・不祥事の子(5) 3.（反）マスコミ・情報社会の子(5) 5.無気力・無関心の子(4) 5.孤独・孤立の子(4) 5.多様化の子(4) 以下各３人のもの ・競争社会の子 ・犯罪社会の子 ・利己主義の子 ・環境保護の子 ・成人病の子 ・安楽志向の子
＜90年度(115人)＞ 1.平和・中東・国際協調の子(22) 2.学歴社会・受験戦争の子(20) 3.環境保護・緑の子(14) 4.経済大国・金満ニッポンの子(12) 5.（反）マスコミの子(7) 6.無関心・知らん振りの子(5) 7.女性に尽くす子(4)	

ては困る。だいたい農薬のせいでバカでかくなったのかもしれん。さわらぬ神に祟りなし。早く洗濯してテレビでも見よう』。だから桃太郎は生まれない。」

88年度は以下の通り（回答数190）[4]。
①学歴社会・受験戦争の子(25)　②甘え・マザコン・優柔不断の子(25)　③平和・国際協

調の子(17)　④金銭欲・金持ちの子(16)　⑤無気力・無関心の子(16)　⑥ファミコン・TVゲームの子(13)　⑦科学・ハイテクの子(10)

第一位には二種類あるが、それぞれ二つずつ例示してみよう。

「受験戦争の子。勉強や塾に忙しくて、鬼退治に行く暇がない！」

「勉強の子。桃太郎はいつもまわりから『勉強勉強』と言われていたが、勉強していると鬼がやってきては遊ぶようにけしかけていた。勉強ノイローゼの桃太郎は鬼を煙たがり、鬼退治に出かけた。しかし鬼にすぐ捕まえられ、いろいろと語り合った。そこで桃太郎も遊ぶことの大切さを知り、塾も学校も壊したそうな。」

「親の言いなりの子。おばあさんはとっても教育熱心であったため、桃太郎を鬼ケ島という塾に行かせた。しかし、桃太郎は自分が何をしていいのかわからず、毎日『おばあちゃーん』と言っては泣いている。鬼は腹を立てて、『宝物をあげるから二度と来るな！』と言った。」

「優柔不断の子。鬼退治に行く途中、キジ・さる・いぬが出てきて『きび団子をくれるなら』と言ったが、桃太郎は団子をどうするか何日も迷ってしまい、きび団子は腐ってしまった。鬼退治をする時、赤鬼が二匹出てきて、どちらから倒そうか迷ってしまった。鬼はあきれて帰ってしまった。」

七位の桃太郎ばなしは、「歩いて鬼ケ島へ行くという能率の悪いことなどせず飛行機に乗り、刀ではなく銃を、犬・猿・雉ではなく戦闘用ロボットを引き連れていく」桃太郎であり、あるいは「最新式の武装をして鬼ケ島へ向かったが、島全体が巨大なハイテク基地となっており、一歩も入れずに帰っていく」桃太郎であった。

その他、番外のものをいくつか示してみよう。

「リクルート・コスモスの子。桃太郎は鬼退治のためお供する仲間たちに株を分け与えた。ところが、その事実を知った鬼が桃太郎のインサイダー取引きを告発し、桃太郎は逆に追い込まれる。」

「自粛の子。桃太郎はかねてから鬼退治に出かけようとその準備をしていたが、ある事情でいま日本が自粛ムードにあるのを知り、鬼退治をやめ、しばらくおとなしくすることに決めた。」

「円高の子。円高を利用して海外に出かけ、各地の名所（＝現代の鬼ケ島）を荒し回って、海外ブランド品（＝宝物）をどっさり買い込んで帰ってくる。」

「ドーピングの子。桃太郎は鬼退治に筋肉を増強させていきましたが、卑怯者として迫害されてしまいました。」

他に「グルメの子」「マルサの桃太郎」などもあったが、総じてこれらは、87年、88年に生じた事象をダイレクトに反映させたものと言えよう。ちなみに当時の流行り言葉は、懲りない面々・マルサ・ジャパンバッシング・ペレストロイカ・自粛・ドーピング・５時から男・言語明瞭意味不明など。

日本の現状を反映させての新たな桃太郎ばなし作り、その最後は90年度ベストセブンである（回答数115）。

①平和・中東・国際協調の子(22)　②学歴社会・受験戦争の子(20)　③環境保護・緑の子(14)　④経済大国・金満ニッポンの子(12)　⑤（反）マスコミの子(7)　⑥無関心・知らん振りの子(5)　⑦女性に尽くす子(4)

イラク軍のクウェート侵攻は90年８月のことであり、いわゆる湾岸戦争突入は翌年１月のことであった。アンケートは90年12月に実施されており、一位の多くは焦点を「人質」問題に当てている。
「平和の子。海外で起きている国際紛争を解決するために出かけていく。今であれば中東問題を解決するため、人質救出のためにイラクのフセイン大統領と桃太郎は会談する。この時、日本国憲法第９条にのっとり、あくまで話し合いで解決する。」
より直截に、桃太郎＝アントニオ猪木参議院議員とするものもあった。また、この問題への日本の対応に疑問を呈し、日本独自の方針が問われているのでは？自立に目覚める桃太郎を！と主張する「自立の子」や、他人が何かをやろうとするとズルズルとそれに引っ張られていく、金は出すけど・・・の桃太郎としての「同調の子」、何もかも曖昧にしてしまうリーダーシップのとれない「ファジーの子」桃太郎とするものもあった。
第三位は次のような話。ハーグでいわゆる環境サミットが開催されたのは89年３月のことである。
「自然の子。環境問題が大きくクローズアップされている。このままいけば日本が、地球が滅びてしまうかも知れない。この危機に立ち向かうのが桃太郎。桃太郎のおじいさんが柴刈りに行けるような豊かな森林、おばあさんが洗濯できるようなきれいな川になるように。鬼は地球を汚すすべてのものをさす。ゴミや工場の廃物や車の排ガス・・・文明も含まれるのかも知れない。」
「金満ニッポンの子」桃太郎は、「企業を買い占めたり、高い絵を買いあさったりして、世界の反感をかっている」桃太郎であり、「物不足、金不足に悩む鬼ケ島に到着後、巨額の援助を約束し、占領されているかつての所有地をお金で買い取るつもり」の桃太郎である。
「無関心の子」「女性に尽くす子」の例は、それぞれ次の通りである。
「知らんぷりの子。桃太郎は鬼がいるとわかっていても退治に行かずに、自分は平和に暮らすでしょう。宝に関しても、現代は物が豊富だから危険な目にあってまで欲しいとは思わないでしょう。」
「アッシーの子。女の子たちに従えられて鬼ケ島にドライブに連れていかれる。そこで宝物が欲しいとせがむ女の子たちのために、死を覚悟で鬼たちに挑む。しかし、実は鬼も女性たちに従えられていて、桃太郎とおとこ鬼の世間話・愚痴が始まる。」
「ウーマンの子。桃太郎は女の子であり、その名も桃子。おじいさんとおばあさんの仕事も全く逆。鬼は男女平等に反対で女性の能力を認めない人々。家来は、今の若い弱くなった男たち。団子の代わりに電話番号を書いた紙を渡します。」
他に、「消費者の代表桃太郎は、一円玉と五円玉をもって政治家のところに投げつけに行ったとさ」という「消費税の子」や、「24時間働き続け休む暇もない桃太郎。ある日、働くことが嫌になった桃太郎は、全財産をもって世間から身を隠してしまう。その後桃太郎がどうなったかは誰も知らない」という「リゲインの子」などがあった。ちなみに、消費税の実施は89年４月のこと、また同年の流行語に「ＮＯと言える日本」や「おたく族」とならんで「24時間タタカエマスカ」がある。

以上、80年代の四次にわたるアンケートの結果を紹介してみた。そこでは、それぞれの年度（および前年度）に生じたできごとをそのまま反映させた桃太郎像も多く、それらは

一過性の、あるいは短期的な桃太郎像といえるかもしれない。

他方、常にアンケートの上位に顔を出す桃太郎像というものもあった。そのようなものとして特に、「学歴社会・受験戦争の子」「平和・友好・国際協調の子」「無気力・無関心の子」の三つが挙げられよう。このクラスにおける、との限定を付した上で、ここでは、この三点をもって、1980年代の桃太郎像としておこう。したがって、そこで指し示される80年代の現状認識とは、国際的には、平和達成に向け友好・協調関係が築かれるべき時代、国内的には、学歴社会、受験体制下の歪みに苦しみ、特に子どもの世界に、利己主義を伴った無気力・無関心が蔓延する日本、といったところであろうか。

ちなみに、90年代のアンケート結果について補足しておけば[5]、〔表1〕に示されるように、その特徴の第一は、かつて上位を占めていた「平和・友好の子」の姿が見られなくなっていることである。第二は、86年に突出しその後消えていた「いじめの子」が再び上位に登場していること、第三は、88年に一位であった「甘え・マザコン・優柔不断の子」と重なりつつも微妙にニュアンスの異なる「主体性のない子・マニュアルの子」が、上位に顔を出していることである。なお、93年に初めて現れ95年にも登場している「宗教の子」とは、たとえば次のようなものである。

「救世主の子。現代は世紀末だと言われる。自然環境は破壊され新興宗教が人々のこころをむさぼっている。そのような荒廃した世界を救おうという人々の願いから生まれるのが、日本版イエス・キリストとしての桃太郎だ。」

「マインドコントロールの子。鬼ケ島は洗脳された人たちばかりで、鬼とはマインドコントロールを使い人に犯罪などをさせる者。桃太郎も鬼退治に苦労するが、きび団子を使って人々を味方につける。退治後、桃太郎は“きび団子教”の長となって、人々をやはり洗脳していく。」

4．講義での論点――第二回講義③

初回講義での桃太郎ばなしの変容の紹介および現代版・桃太郎ばなし作りアンケートの実施、そして第二回講義前半での今年度および過年度アンケート結果の紹介を経て、講義はいわゆる本論に入ることになる。その中で言及・解説された主要論点は、以下の通りである。

○これまでの桃太郎ばなしに関する講義・アンケートの内容から何がわかったか。

ここでは、時代によって桃太郎像が異なっていた、更に言えば歪められていた点、作者によって、つまり各人のモノの考え方・見方によって異なっていた点を確認した。

○歴史も、常に書き換えられうる。

ここでは、歴史像も桃太郎像同様、多様・変容・歪曲の可能性があることを伝えた。そして、それはなぜか？を問い、①新しい事実の発見によって書き換えられる、②歴史を見る者の立場・時代・モノの考え方などによって、見る者の目の置きどころ・課題が違うから、組み立てられる歴史像（＝歴史の具体像と意味）も違う、の二点を答えとした。

①については、1949年の岩宿遺跡の発見まで、日本列島には一万年以前の文化はない、と考えられていたこと、が90年代には（上）高森遺跡の発見によって、それが50万年前に

まで遡りうるとされていることを例示した。②については、〔目の置きどころ〕として民衆の（動きの）重視・軽視・無視の三種類を挙げ、それぞれから導き出される農民一揆の〔歴史像〕の違いを確認した。更に、「ＡＢ両国は衝突した」と「Ａ国の侵略にＢ国は抵抗した」、「戦争が起きた」と「Ａ国が戦争を起こした」を比較考察することを求めた。　その上で、もう少し歴史像について考える、として、信長の伝記を例に、「49年生きた信長の伝記がなぜ一日程度で読めるのか？」「伝記が何種類もあり、全く異なった信長像が描かれるのはなぜか？」を問い、上記論点①②を再確認した。そしてその延長線上に、歴史家（作家）がそれぞれの立場・視角から行った個別事実の取捨選択、不明部分の推測・復元が必ずしもすべて正しいとは限らない、歴史像は結果として歪みうる、歪めうる、ことを展望した。

○歴史像の歪曲はどう防ぐのか。ある仮説が通説・定説として受け入れられた根拠は？

ここでは、桃太郎に再度登場願い、変容された桃太郎像が戦後本来の姿に戻ったのは恣意的に歪められたとの反省によるものであり、また戻りえたのは、一応元の話とされるものが存在するからであることを、まず確認した。その上で、しかし、歴史像には「元の話」というのは通常存在せず、タイムマシンもない以上、どうすれば、信頼できる信長伝を読みたいものだ、との希望はかなえられるのかを問うた。

その答えとして、①その仮説（＝信長像）には根拠があるか、その仮説を反証するような事実は存在しないか、②その仮説は論理的整合性をもっているか、つじつまがあっているか、の二点を挙げた。①については、この実証主義こそ歴史学の基礎中の基礎であることを強調しつつ、しかし、残された史料が少ないために、この「論より証拠」を問えないことも多く、それゆえ②を不可欠とすることを伝えた。そして、「邪馬台国はどこ？」「写楽は誰？」「なぜ光秀は信長に反逆したのか？」に対する人々の回答模索に簡単に触れつつ、①②の歴史学上の基礎が歴史の楽しみに直結している点に言及した。

――以上で第二回講義の時間は終了する。（正確には、新たなアンケートを行った上で終了する。）したがって以下は、第三回講義の内容であるが、第四回以降に比してヨリ継続的な内容であるので、要点のみ記しておきたい。

○論理的整合性とは、具体的にどういうことか。

ここでは、論理的整合性という抽象的な、その意味で難解な言葉を、「論理的に説明がつくか」「論理に飛躍がないか」「『木を見て森を見ず』になっていないか」等に置換した上で、それぞれ具体的な歴史（研究）上の事例を挙げて解説した。一例を示せば、元寇（＝なぜ大国である元に勝てたか）に関して「鎌倉武士がよく戦い暴風雨によって失敗」との説明があるが、これを〔森を見よう〕すなわち文永・弘安の役より長期に、東アジア世界の中で考えてみるとどうなるか、といった具合である。（但し、「考えてみた」結果をそのまま小学校で教えよ、という意味ではないことを付言してある。）

○実証性・論理的整合性（＝歴史学のルール）は、他人を説得する時の技術と同じ。

ここでは、難解なことを言っているわけでも、受講生に「歴史家になれ、なった時にはルールに気をつけよ」と言っているわけでもないこと、歴史学のルールは日常生活で実践

していることであり、どのような職に就こうとしばしば問われることである旨述べた。

○歴史像を意図的に歪める、あるいは歪曲した歴史像を正当化しようとするテクニックに注意。

この種のテクニックがまかり通っている現状にかんがみ、具体的事例を挙げながら、実証主義を逆手にとっての、一部証明されないから全体も怪しいという論法、客観的第三者的立場を装って、色々な要素・側面を列挙して、あるいは次元の違う話を対置して重要論点を意図的にボケさせてしまう方法などについて述べた。

○歴史学のルールは歴史教育の基本。

ここでは、教師は自らにのみならず、子どもにも授業を通じて、実証性と論理的整合性の必要を問うべきである、この二つを体験させよ、と主張した。授業で根拠の明示、論理的展開（とくに「なぜ」の追求）をやらない時、歴史は暗記物になるからである。

そして、仮説構築・実証・論証こそは、推理小説に似て、歴史学習のおもしろさの核であることを強調し、これを十全に指し示している、更にはこれまでの本講義内容の総まとめとしても利用しうる加藤公明氏の“貝塚の犬の骨”の授業実践記録を配付・紹介した。（そこで、この授業を共有するために、上述の第二回講義末アンケートは、加藤クラス同様、次の文言となる。「貝塚からは犬以外にも色々な動物の骨が出土する。しかし、それらの骨は折られたり削られたりしてバラバラ。犬だけが死んだままの完全な遺体で出土する。一体なぜだ。自分の答えの結論を『この犬は○○だったから』と書き、そう考えた理由を付しなさい。」）[(6)]

5．なぜ桃太郎ばなし（アンケート）か？

なぜ、講義の初期1.5 回分を費やしてまで桃太郎ばなしにこだわるのか。以下、その意図するところを明らかにしたい。

①まず、それが、歴史好きであれ歴史嫌いであれ、誰もがそこに入っていくことのできる、耳を傾けうる素材であるということである。講義一般に言えることであろうが、いかに教師の側が誠実に内容づくりをしても、それが受講生にとって難解であるならば、講義は一方通行的なものにならざるをえない。とりわけ導入部である。そこでは、誰にでも理解できる、そして多少とも刺戟的な内容が望まれるのではなかろうか。桃太郎ばなしの選択、その変容の紹介、現代版・桃太郎ばなし作りアンケートの実施は、これに適合的であると判断した次第である。

②そして、本稿冒頭でも述べたように、歴史学習は何よりもまず楽しいものでなければならない、とりわけ小学校では子どもを歴史好きにすることが肝要だ、というのが筆者の見解であるわけだが、それを伝える講義そのものが少しも楽しくないのであれば、一種の矛盾に陥ることとなり、受講生も筆者のメッセージをまともに受けとめてはくれないであろう。したがって、そも講義全体をそれなりに面白く楽しいものにすべく工夫する必要が要請されるのであるが、導入部においては、桃太郎（ばなし）を活躍させることでその任を果たしうる、と考えた次第である。なお、筆者も別講義では、「（初めは多少難解でも続け

ていくうちに次第に）わかって楽しい」というあり方を追求することもあるが、本講義のような場合は、「楽しくわかる」ことが優先されるべきで、そのためには方法論上、言葉は悪いが、受講生に大いに媚びて差しつかえないと考えている。また、やや楽観的ではあるが、歴史教育を楽しく行わん、との志向をもつ教師は、その工夫を重ねる中で自ずと歴史教育上の他の本質要素にも気づくのではなかろうか。

③その「歴史教育上の他の本質要素」については、桃太郎関連の講義の後に筆者が逐次解説していったわけだが、それらの理解を桃太郎ばなしが容易にするのではないか、というのが第三の理由となる。伝えるべき本質要素のひとつに、筆者は、〔歴史も常に書き換えられうる〕を挙げたが、これによって歴史像というものの非単一性・非固定性が明らかになり、受講生のもつ教科書絶対的、正答主義的思考にゆさぶりをかけることが可能となろう。他方、この〔歴史も常に書き換えられうる〕は、歴史を見る者の目の置きどころ（ないし歴史観）の存在をクローズアップすることになり、その根底にある人々の多様な価値観や立場およびそれへの時代の影響の存在、そしてそれらと歴史像との関係に目を開かせることになる。ここから、歴史の見方を変えてみたり史実を多角的に見ることの重要性、あるいは諸々の歴史観たとえば英雄史観・愛国史観・西欧中心史観などの特質如何、更には学習指導要領と文部省の歴史観との関係如何、といった論点への展開も可能となろう。（これらは主に第四回・五回講義で扱われる。）そして、以上のことを、桃太郎ばなしの変容の紹介および現代版・桃太郎ばなしアンケートの集計結果紹介・内容紹介が、理解しやすくするのである。

④〔歴史像の歪曲をどう防ぐのか〕も本講義の重要論点のひとつであるが、これも、「あえて日本の現状（現代）を反映させて新たな桃太郎像をつくるとしたら、どうなるか」とのアンケートで一種の歪曲の試みを経験させているから、理解が容易となるのではないか。であるとすれば、受講生は続けて、歴史学（習）上の最重要ファクターである実証性と論理的整合性の問題に目を開いてくれようし、後に扱う、歴史像歪曲の一元凶たる歴史観の押しつけ・注入の問題にも耳を傾けてくれることになろう。歴史については誰もが一家言持ちうるだけに、昨今、浅薄な議論がまかり通っているが、それだけに、歴史学のルールを明確にし、歪曲の因って来る所以、更には、そもそもなぜ誰もが「一家言持ちうる」のか等を確認しておくことは大切である。他方、実証性と論理的整合性という歴史学のルールは暗記主義を克服する歴史教育の基本でもあり、仮説を立てそれを実証・論証することこそ歴史学習の楽しさにつながる、という点を、ユニークなものを含む創作桃太郎ばなしの紹介の余韻の残る中で伝えることは、それなりの意味をもとう。ちなみに、創作の条件としての〔日本の現状を反映させて〕は、受講生に自分の生きる現代社会を自身の目で（批判的に）眺めることを要求し、かつ少年の〔桃太郎像を〕という条件は、自ずと子どもをとりまく社会環境に思いを致させることにもなろう。歴史を見る者の課題は現代社会に発しているのであり、また、受講生の将来の（歴史）教育の対象は小・中学生なのである。こういった点もまた桃太郎アンケートのもつ捨て難い効能のひとつではなかろうか。

さて、こうしてみると、桃太郎関連そのものに割く時間に比して、本論部分の講義内容は乏しく、しかも当たり前のことしか言っていないかに見える。実際その通りなのである

が、しかし筆者には、その「当たり前のこと」を自明扱いせず、基礎的にしてかつ本質的なものとして提示することが、現在強く求められているように思われる。上掲①に戻ることにもなるが、一部の優秀な受講生にしか通用しないような「高尚な」（＝難解な）議論をなすことは、（この種の講義では）講義者の自己満足を引換えにした受講生大半の切り捨てと同義であり、また、昨今のルールをないがしろにした歴史（教育）論議の拡がりを助長するだけである。自省の念を込めて言うのであるが、三段跳びでいうホップをこそ先ずは確かなものにすべきであろう。

またその際、ステップやジャンプにあたる内容をホップにもってくることも慎まねばならないであろう。詰め込み学習は避けよ、と主張しながら、それを伝える講義自体が、いかに重要だとは言え、論点過多ではこれまた一種の矛盾に陥ろう。したがって、「乏しく」見えようが、講義内容は削りに削って「これだけは」というものだけにすべきと考える。その方が結果として受講生の頭の中に残りうると思われるし、徹底的に講義内容を削る作業は筆者自身に、歴史学・歴史教育の本質とは何か、を深く考えさせることにもなったのである。（この経験を有効と捉えて、後に行うアンケートでは、「自分の考える歴史教育上の狙い・目標をひとつに絞って書け」、としてみた。）

6．受講生の感想――結びにかえて

現在では、いわゆるゼロ免課程の拡大によって教育学部を即座に教員養成系学部と見做すことは困難な状況になっているが、それはともかく、教員養成系学部の教科専門担当教員という、歴史教育を考える上ではある種恵まれた立場にいながら、筆者が自らのこれまでの講義のあり方に真に疑問を抱いたのは、ここ数年のことである。「自分の講義は受講生の頭の上を通り過ぎているのではないか。あたかも歴史家を養成するような内容の講義になっていないか。暗記主義・正答主義を批判しながら、現実にはそれに棹さす講義をしているのではないか。そも何らかの歴史教育上の狙いを明確に意図して講義を行っていると言えるのであろうか。・・・」

こういった疑念を抱いた以上は自らの講義に何らかの改変・工夫を施さざるをえない。本稿は、「初等科社会（歴史学）」（「歴史学概論」）という講義における筆者なりの「改変・工夫」の試みの中間報告ないし導入部に限定した部分報告ということになる。したがって、桃太郎ばなしを利用した導入は、既に84年から行っていたとは言え、以後十年近くは格別の目的意識をそこに有していたわけではない。現在では、筆者自身はそれを有意義・不可欠のものと見做しているのであるが、果して、その思いは受講生にも共有されているのであろうか。筆者なりの「改変・工夫」がそう呼ぶに値するものになっているのか否か。そこで今回初めて、受講生に、導入部における桃太郎ばなしの利用に関し、その是非を問うてみた。最後に、そのアンケート結果を紹介しておこう。

アンケートは、

①桃太郎ばなしの変容を紹介した講義は有意義であったか否か（カットしてもよかったかどうか）、

②現代版・桃太郎ばなしの作成および過年度を含むその集計結果紹介・内容紹介は有意義であったか否か（カットしてもよかったかどうか）、

の二つにわけて問い、60名の回答を得た。

このうち、①②双方に対し否定的に答えた者は１人で、「導入の素材として講義への興

味をもたせるという意味では有意義であると思うが、それより深い意味を私は読みとれなかった。」というものである。他に①に対して否定的な者はいなかった。(但し、非回答者の中に存在する可能性はあろう。)

②に対し批判的であった者は3人で、次のような見解である。「面白かったが、現代版・桃太郎ばなしで、はっきりとしたものは掴めなかった。」「全く意味がないということはないが削ってもいいところだと思う。」「物語はこじつけで何とでもなる、ということがわかった。有益無益どちらとも言えない。」

他方、大半の受講生は、導入部における桃太郎ばなしの利用に関し、何らかの意義をそこに認めてくれたようである。以下、いくつかの回答内容を列挙することで、本稿を閉じることにしたい。

〔①「変容」紹介について〕

・有益だったと思う。というのは、今まで桃太郎の話をこんなふうに考えたことがなかったからだ。物語というのは「時代」ではなく「地方」で微妙に変わるものだと思っていたから。

・有益。僕は歴史が嫌いであまり興味をもてないできた。しかし、身近な視点から捉えた歴史というものが存在するということを教えられた。少しは歴史に興味をもてたと思う。

・あの授業で「初等科社会(歴史学)」を受講することを決めた。なるほど、と思う授業だった。

・桃太郎の話は今までひとつの決まった話だと思っていて、時代時代を反映して話が変わっているとは知らなかった。最初にあの授業があることにより、面白そうだ、ととても興味がもてた。

・身近な問題から授業につなげていく、というのは入りやすく良かったように思う。この授業のテーマでもあると思うので、イントロとしてなくてはならないもののように思う。

・歴史の学び方を面白く勉強する方法をひとつ知った。私は今まで歴史とは単に流れをつかんで覚えるものと思っていたので、誰でも知っているような桃太郎を使うことは、とても興味がひけると思った。

・確かに、歴史の事実は時代、人々によって変えられることは知っていた。でも、桃太郎という身近な話が、時代によって大きく変えられていることを初めて知り、歴史が人の手で変えられることの恐ろしさを深く実感することができたのでよかった。

・民話というものがその時代の状況に応じて変化するということがおどろきだった。思想や考え方による歴史のねじ曲げというものが起こりうることを知るためにも、この講義は必要だと思ったし、自分にとっては興味深いものであった。

・この講義の一番最初にもってこられたことで、教科書の記述やその他の本の記述が完全に真実ではないという、受験のための歴史を学んできた我々の概念を大きく崩すことができて、新しい視点で物事を見ることができるようになったと思う。

・私にとって桃太郎講義はたいへん興味のもてるものでした。なぜならば、まず桃太郎が時代によって異なっているということを今まで知らなかったし、この講義があったことにより、なぜ歴史が歪曲されてしまうのかということから始まり、歴史教育において論理的整合性、実証性が大切なのだということが理解できたからです。やはり、具体的なものがあることによって理解が深まりました。

〔②アンケートについて〕
・有益でした。「こんな考えもあるのか。」と感心したり驚いたりできてよかったです。「人の見方」ということについて考える機会となりました。
・この授業に興味をもつことができ、その後の授業も最初からある程度の興味を抱いて受けることができるようになる。あと、自分が受け取っている現在の社会と他人が考えているそれとは違うのだなと思った。
・現代の桃太郎ばなしを考えていた時には気がつかなったが、後になってみると、自分が考えたことは今の子どもに対して私が一番批判的に考えていることであった。そして、現在問題になっていることについて、みんながどれくらい関心をもっているかなどについても知ることができ、よかったと思う。
・昔の人の考え方や社会の状況と今との違いが知れてよかったと思います。アンケートをする時は少し面倒くさく感じるけど、結果をみるのはすごく楽しいので、これは続けてほしい。
・話を作るというのは、今の時代に自分がどういう考え方をもっているかということを考えさせる点で、学校の授業でやると面白いと思う。とりあえず先ず、こういう授業の仕方もあるんだな、という意識を教員になろうとする人に知らせるという点で続けてもいいんじゃないかと思う。
・社会観（歴史観）の違いを身をもって認識することができてよかったと思う。また、自分の視野の狭さというか知識の浅さを感じたし、他の人の考えた桃太郎のはなしを聞いて、なるほどと思うことも多かった。
・アンケートの結果を見て思ったのは、本当に「その時、その時代」を反映しているということでした。「歴史」というものを違う角度から切り込んでいるように思ったので、有意義だと言えると思います。
・とても面白かったと思う。時代をすごく反映するから、その時代が見えてくる。今年だけでなく過去の結果もわかって、特に90年の結果は納得した。
・歴史観は時代によっても個人によっても違いがあるということを学ぶ意味で、桃太郎話のベスト（順位）の発表、読みとれる時代像の授業は意味があると思われる。少数意見の発表も理由がつけられていておもしろかった。

注

（1） 鳥越信『桃太郎の運命』 日本放送出版協会 1983
（2） なお、黒田日出男氏は、桃太郎話の起源について、次のように述べている。「桃太郎の登場は、通説的には室町末期すなわち戦国時代のこととされている。しかし、桃から生まれたことと、鬼が島に鬼退治に出かける話とが一緒になった状態で戦国期に生まれていたという確証はまったくない」。「仮に、昔話としての桃太郎が戦国期まで遡るとしても、われわれが思い浮かべることのできる桃太郎のイメージは、江戸中期以後のそれでしかない」。（『歴史学事典［第3巻かたちとしるし］』 弘文堂 1995、715頁以下）
（3） 回答数が曖昧なのは、もはやアンケートの現物が手元にないためである。
（4） 86、90年に比して回答数が異常に多いのは、この時期の「初等科社会」は地理学と歴史学をセットにして7回ずつ行っていて、この88年に限り歴史学が講義前半を担当したことによる。つまり、例年、歴史学（筆者）の担当は後半であり、その時までに190人の

受講生のうち数十人は脱落していたのである。
（５） この講義は94年までは二年次に開講。95年から「歴史学概論」を兼ね、この年は一、二年対象に開講。96年から一年次対象講義となった。受講生数の漸減は、教員養成課程の学生数減および「初等科社会（歴史学）」が必修から選択必修になったことによる。
（６） 加藤公明『わくわく論争! 考える日本史授業』 地歴社 1991、17頁以下。